

巻頭言 「悲しみの人」

宇野 元

とらえにくいジャック。マリリン・ロビンソンの小説『ギレアド』の登場人物の中で、エイムズ牧師の妻とともに、ミステリアスな人物です。妻ライラの過去は、暗示があるばかりで、具体的なことは語られないため、この女性についてもっと知りたい気持ちにさせられます。(ちなみに「ライラ」という名は、一回だけ口にされます。ジャックによって。)

かたや、ジャックの過去は、外側から詳しく語られます。小さい頃から周りを困らせていた。家の窓ガラスを割ったり、玄関の階段に蜜を塗ったり。大切な写真を盗んだり。そうして、盗んだ車を乗り回す無軌道な青年になった。家から離れ、母親が亡くなったときも、帰らなかった。

ジャックを迎えるエイムズは、戸惑い、しきりに考えます。なぜ今ごろ戻ってきたのだろう？ ジャックは、かつていたずらの標的にしていたエイムズを訪ね、ふれあいを求めます。しかしエイムズはジャックの真意をつかむことができません。教会での二人だけの、信仰をめぐる会話の際にも。この男はどれだけ真面目に話しているのか？ 経験豊かな牧師は、親身に接したいと願っているにもかかわらず、つい疑いの目を向けてしまいます。

けれども、エイムズのまなざしは、ジャックのありのままの姿をも映しています。痩せて、服がだぶついて、若さは消えている…… 人々の愛に囲まれながら、ひとりぼっちの存在。その心の中にはどんな痛みが秘められているのでしょうか。

本作の姉妹編『ホーム』の終わりに、イザヤ書の言葉が引用されています。町を去る兄を見送るグローリー。聖書に親しむ彼女の瞳に、兄と「苦難のしもべ」の姿が重なります。

悲しみの人

深い悲しみを知る人 (英訳イザヤ書 53, 3)

悲しみを知る人のかたわらに、苦難のイエス・キリストがいてくださいます。悲しみを理解し、担ってくださる方として。どんな悲しみも、負ってくださらないものはない。それを、無言のうちに力強く示して。